
第5話 帰らざる時の果てその1

フェニックス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

第5話 帰らざる時の果てその1

【Zコード】

N6189Y

【作者名】

フニックス

【あらすじ】

剣ミサトは盗賊団のアジトに潜入していた。途中で出会った囚人ボスと共に地下実験室へ行く。人造人間ROUSE部隊の捜査に向かう二人。そこで見た物は、魔法使いには禁じ手とされていた古代魔法。サクリファイス（生け贋）の印だった。二人は急いで脱出し、この事實を伝えようとする。だが時は既に遅かった。監視メカによって、つけられていた二人。その映像を公開し、盗賊団の力を知らしめようとするショットガンナー。遂に両雄は決戦の舞台に立つ。

武力介入決行

ミサトはまだ息があつた。

ガハッ！ガハッ！

崩れ落ちた体を引きずりボスコに向かつ。

「ボッ……ボスコ。すまない……足手まといに……」「んなこと、言つなんだ！オラを相棒と呼んでくれたべや。田舎者のオラを！レオさん。早く手当てを！」「……お前は？」「オラ、ミサトと約束しただ。必ず勝つと。勝つて故郷に錦を飾ると」「……そうか。無理はするなよ。それがお前の宿命なら俺達はここで見ていよう。無理はしない程度にやつたれ！田舎者」

「ウググググッ……ボスコ。アタイからの礼だ。受け取れ」ミサトは最後の力を降り絞り、魔法のコタチを作つた。ボスコは丁寧にそれを貰い、キッとショットガンナーを睨み付ける。

ミサトはコタチをボスコに渡し、満足そうに手を締める。そのまま横になり、ボスコの雄姿を観戦する。

手負いのボスコに無傷のショットガンナー。彼の後ろには虎のオーラが赤く輝いていた。

「ウオー！烈火爆煙破！」ボスコは弾薬を抱え彼に飛びかかる。タックルで押し倒し、そのまま弾薬に火を点ける。「終わりだー！シヨツト！」ボスコは彼を抱えたまま、宙に舞う。「これはミサトさんの技だ！コタチ列破斬！」ボスコは一本のコタチをショットの肩に刺す。

「ウオー！爆煙天昇！」

ボスコは自分の弾薬を抱えて爆発した。

その瞬間、空中でクルッと方向転換しキックで彼を蹴り飛ばすショットガンナー。

爆風に包まれる盗賊団のアジト。

「どうだ？やつたか？チャンク」「わからない。だが煙の中、誰かが立っている。うつすらとだが見える」二人は目を凝らしてその姿を見る。

しばらくすると爆風の霧が晴れてくる。そこに立っていたのはショットガンナー。ボスの肉体は砕け散った。ミサトはその光景を見る前に亡くなっていた。あのコタチは彼女が残した最期の希望だった。

「クッククック。残念だ。非常に残念だ。お一人さん。肩慣らしこもなりやしないね。まったく狭き器よ」「黙れ！ショットガンナー！貴様、マリアでは飽きたらズ、ミサトやボスまで手に掛けるとは！許さんぞ！」「フツフツフツ。レオ君。大人げ無いぞ。たかだか三人では無いかね？しかも我輩の様な武人ならまだしもウジ虫の力スにも満たない三人。何の役にも立たぬ者達では無いかね？」「…………ショットガンナー。今の戦いで力は認めよう。だが生き物を愚弄した罪は償つて貰うぞ。今日はサービスで引いてやろう。ミサトの亡骸は貰つてくれぞ。行こうレオ」チャンクは冷静に怒りを抑えた。

「面白い。リターンマッチといつ。今日はタイムアップだ。私の力を見せしめるには、充分だろ？準備が出来たらまた来てくれないかね？私はここで待とう」「…………ショットガンナー。お前には

冥土すら生温いわ！永遠の闇が相応しい。永遠の中でせいぜいもがくが良い」

レオは別れ際にそう言い残し、去つて行つた。ミサトの亡骸を抱えて。

ボスは頭を抱える。「……なんと言つ事だ。保安官が……人民の安全を考えなればならない保安官が……ウジ虫やらカスにも満たないやら……ショットガンナー。恐ろしい魔神よ」「……寂しくなりますね。ボス」情報屋は静かに部屋の扉を閉めた。

「上層部より伝令。これ以上は待てん。ボス。上陸許可を」「……上層部の方々。これよりウエストホース大陸への上陸を許可します。お気をつけて……」ボスは机に置かれたレオとピートの保安官バッヂを見た。「……すまない。私が潜入許可を出していいなければ助かつた命が。レオ、ピート。本当に申し訳無い。私の判断ミスだ。恨むならワシを恨め。それで良い。それで……」

遂に上層部の武力介入が解禁された。何一つ手掛かりも無い状態で、大陸は混沌の時代を迎える。

続
<

レオ・バレッタとチャンクは盜賊団のアジトを後にした。

「ピート。待たせたな。帰るうか?」「…………お疲れをまでした……たつた今、上層部が進撃したらしいですよ」「明朝じゃなかつたのか?」「H-H。早まつたらしいです。ボスも上陸許可を出しました」「…………だろうな。俺だつて助けたかつたさ。マリアにしてもだ。これからどうなる?」「今、調べてます。上層部の武力介入をした大陸がどうなるか。あんまり良い噂は聞きませんがね」

一方、上層部には一人の男が訪ねていた。「入りたまえ」「失礼いたします。浮游城の元皇帝、AINシャーク三世を連れて参りました」「ウム。通せ」「失礼いたします。元老院。私は浮游城の皇帝、AINシャーク三世です」「くるしゅうない。樂にしてくれ皇帝閣下。どのよつなご用件で?」「ハイ。オープの欠片の手がかりを探してまして……」「オープの欠片?神々の遺産だと言われるアレか?」「左様でござります。ご存じで?」「フム。世界の調和を司るオープ。調和の聖宝じゃな。して、それが皇帝閣下とどきのようない関係で?」「調和のバランスが崩れかけております。浮游城は沈み我々は古代の飛空挺ジユブナイルで参りました。それにこのオープと共に」「…………それは、火のオープ。貴方が継承者だと?」「ハイ。私の祖先。始皇帝ロキが残した遺産です」「…………すまないな。今、忙しいんじや。急ぎウエストホースへ向かわなくては……」「ウエストホース大陸へ?何かあつたのですか?」上層部の元老院は全て話した。

「なるほど。それは一大事ですね。我々も加勢いたしましょう。ち
ょうど火の神、インフェルノの遣いアドニスもいますし。我々もジ
ュブナイルで向かいましょう。神々の『ご加護も必要でしょう』「オ
オ。頼めるか?皇帝陛下」「お引き受けいたしましょう。盗賊団と
なればいすれ争う事となりますし。都合が良いです。『ご同行させて
下さい』」「ありがたい。今は戦力が欲しくてな。オープの情報はこ
ちらも興味がある。調べさせよう」「ありがと/or/ります」

「で、皇帝陛下。引き受けたのですか?その盗賊団討伐の話しが?
」「アア。しあわせがないだろ?あの場では。仮にワシが断つたら
何をされるか。そりだろ?」「まあ、間違っちゃいないですがね。
AINシヤーク。今度、寄り道する時は『ご相談を』アドニスは席を
立ち飛空挺から外を見た。「で、そのウエストホースには行つた事
はあるんですかね」「ならず者の大陸。立場上、避けて通つていた
な」「へ?ならず者?そんな所に手がかりをなんて無いと思ひます
がね」「噂では、土の神、ライドーが降り立つた地だと云つ話だが
な」「そりや、行きましょよ。AINシヤーク。パパッとすまし
てサクッとその聖宝を頂きましょ」

一方、剣ミサトとボスコは黄泉の世界にいた。

「ン？ ナンダ？」いつ。ナア、ジャック。ジャック・ギャザ里斯！ 来てくれよー」「パトレシア！ 何度言つたらわかるんだ！ 前足で蹴るなど。お前は馬なんだからおとなしくしてろつて！ だから暴れ馬なんてレットルを貼られるんだぞ」

「ン？ 女と男か？ 無理心中でもしたかな？ オーイ！ 聞こえますかー？ わかりますか？」「…………ンー…………痛みが無い。ここは…………」「オオ。気づいたか？ ミサト」「ボスコ？ あんた何やつてるのさ。ショットガンナーは？」「オラ達、死んだらしいな。ここは黄泉の世界なんだとさ。迎えてくれたのは、あの人と馬らしいな」「アー…………イツテテテ…………まだ痛むわ。ありがとうございます。貴殿方は？」重い体を起こしミサトが聞いた。「気づいたか？ 俺はジャック。ジャック・ギャザ里斯。神殿の警備員だった男さ。パンドラの聖杯を守る警備員。で、こいつは…………」「パトレシアです。愛馬パトレシア。好きな物は干し草やら野菜やら。持つてません？」「ウワツ！ 馬が…………喋つた」「亡くなつた人が喋る方が不思議ですよね。ジャック」「ハハハハ…………お互い様だ。どうだね？ 少しは体が慣れたかね？」「エエ。少しは。私は剣ミサト。クノイチの魔法使いよ」「オラはボスコ。囚人の魔法使いだべ。パンドラの聖杯つて、浮游城だべか？」「そうさ。行つた事あるのか？」「バカにスッでねえ。オラは盗賊だべ！ 知つてるべさ」「で、盗賊さん。エサは？ オイラ腹減つたなあ。なんか頂戴よ。お手もお座りもできるんだぜ。何でもするからさ」「パトレシア！ 何度言つたらわかるんだ！ エサの恐喝はするな！ 足りてるだろ？」「ハー…………

…わかってるよー。ちょっとオネダリしただけだろ？恐喝未遂だつて」「すまないな。気にするな。軽く流せば良い。で、どうするんだ？これから」「わからないわよ。だつて来たばかりですもの。黄泉の世界に」「そうだったな。まあ、時間は腐るほどある。ゆつくつしてこきな。少しば骨休めになるだらつへで、何故ここへ来た？」//サトとボスコは全てを話した。

「なるほど。で、亡くなつたと。そのショットガンナー」「待てよ。ジャック。確か3年位前に会つたぜ。オレ見たもん。その……ショットガンナー？ちょうどそここの山を散歩して、トイレに行つて……アレ？どこだつけ？」「パトレシア！本當か？俺の留守中に？案内しろ」「知らねえつて。3年も前だぜ。3年前にどこで用を足したなんて覚えてるかつて！」「つまり…………一度はこつちに來てるのよね。あの山の何処かに。行きましょ。ボスコ。何か掘めるわよ」「…………オラ、行くのは構わねえが行つてどうスッだ？生き返るか？できるわけねえべさ」「いや。出来るさ。やり残した事があつて寿命が残つてる時はな」「く？出来るだか？」「出来る。1日限定だがな。ホレ。あんたらの噂を聞きつけた奴もいるみたいだぜ。出でこいよ！隠れてないで！」「…………さすがだね。あんたが新しい保安官か？イヤ。悪く無いね」「貴女は？」「マリアだよ。レオ・バレッタの元、相方であり恋人でもあつた人さ。心配するな。奴も水臭い奴でさ、毎日アタイの墓碑に祈りを捧げてるのさ。話しあ全部聞かせて貰つたよ。黙つて見ているガラじやないんでね。介入させて貰うよ。勝手に入るからね」「マリアさん。……噂には聞いています。レジンドハンター・マリアですよね」「レジンド？そなかいアタシヤ生きた伝説かい？似合わない肩書きだねえ。虫酸が走るよ」「行きましょう。あの山に。パトレシア

さん。連れて行つて下せこ。良いですよね。マリアさん」「オラも
いぐだよ」「ボスコ?」「いぐだよ。ナツ良いべ?どうせ暇になる
んだ」「ハー……しようがない。パトレシア。散歩だ。散歩だ
からな。俺達は生き返れない。そうだろ?案内だけだからな」

こうして、AINシャークアドニス、アドニスの浮遊城チームとパトレ
シア、ジャック・ギャザリス、剣ミサト、ボスコ、マリアの新しい
旅が始まった。

(詳しく述べ、第1章を参照して下せこ)

続く

レオ・バレッタとチャンクはマリアの墓碑の前で酒を燐つていた。

「チャンク。俺は……俺はこの大陸を出ようと思う。誰も知らぬ辺境の地へ」「そうか。寂しくなるな。だが、勘違いするな。お前が3年前にショットガンナーに会ったから狂った訳ではない。狂つた世界に飲み込まれただけなのだ。どこへ行つてもその理屈は変わらない。何もな」「そうかもな。だが、俺が出ていけば、お前やボス、ピートにしても悲しまずには済む。何も言わずに出ていくよ。餞別代わりにせめて見送つてくれ」「…………お前は土の神ライダーの継承者なんだろ？それはどうする？」「…………土の神は……継承されなかつた。それを背負つた俺は一生、償つて生きなくてはいけない。一生な」「アア。ここにいたかお前たち。さて、俺も付き合おうか」酒の樽を抱えたボスが歩いて来た。「レオ、チャンク。それにピート。君達は今日付けで解雇だ。解雇つてより保安所を閉めたんだがな。全権を上層部に預けた。……これで良いんだ」「すいません。何もできなくて」「良いんだ。レオ。さあ飲もう。酔つた頃には上陸してゐるさ。誰にも気づかれないだろ？酔つ払いなんて」

ウエストホースの遙か彼方より、船が上陸する。高台で見つめるピート。

「あれが上層部。なんて大軍なんだ。奴等が上陸した大陸は全て支配下になつてゐる。おそらくこゝも長くは無いだらう」

「ユーブナイルも上陸する。「さて、久しぶりの大地だな。行こう、アドニス」「待てよ。飯、飯！残してゐるし。もつたいない」アドニスはパンをくわえながら上陸した。

「アインシャーク。こゝがウエストホースか？隨分、枯れ果てた土地だな」「アア。だから囚人向きなんだろうよ」「なるほどねえ。じゃ、まあ、行きますかね」「アドニス。わかつてゐる。土の神ライドーの継承者はショットガンナーの後に探せば良い。どうせ手掛かりも無いんだ」「まあな。上層部に顔を立てりや、協力してくれんだろ？」「それだけじゃない。力を求める者はいずれ神々の器に挑戦したくなるのさ」「そうか。さすが皇帝閣下。つまりショットガンナーを追えば土の神ライドーにぶつかると。いづれ」

「皇帝閣下ー！閣下ー！作戦会議やりますからー。ちょっと来ていただけませんかねー？」元老院がアインシャークを呼ぶ。「アア。今、行きますからー」

続く

「元老院様。彼が話していた、火の神インフェルノの遣いアドニスです」「心強い！聖騎士ロキの継承者に神の遣いですか」

AIN-SHARK三世とADNEESは元老院と共に盜賊団のアジトへの武力介入の作戦会議をしていた。

「良いか。我々が魔方陣の煙幕を張る。それである程度は抑えられるはず。そこで、突入してほしい。第1陣が中に突入し2陣はバッカアップ。剣士1の援護2のトライアングルフォーメーションで乗り込む。質問は?」「我々は2陣で行こう。上層部を援護する。状況も見たいからな。良いだろ?」ADNEES」「ウム。作戦は明朝決行する。今日はゆっくりするがいい」「わかりました。それでは明

朝」

AIN-SHARKとADNEESはしばらく大陸を散歩していた。

「ハー。やはり大地は良いなあ。いつも飛空挺の旅で飽きていた頃さ」「まあ、そう言つた。ADNEES。空き時間ができたんだ。探すぞ、土の神ライドーの継承者を」「なんだ? あいつら。墓場で飲んだくれやがつて」「アア。保安所の連中らしいぜ。まあ、無理も無いさ。初めて上層部が上陸したんだからな」「つまり、用無しか?見事なご身分だな。真つ昼間から飲んだくれやがつて」「まあ、良いさ。まずは情報収集だな」二人はレオ達に近寄る。

「すいません。保安所の方々ですよねえ？連中について教えて頂けませんかね？」「アー……ヒック……あんたちは？」「失礼しました。浮游城から参りました。皇帝のアインシャーク三世です。こいつはアドニス。火の神インフェルノの遣いです」「ヒック……火の神？こいつが？よせやい！神々の話しなんか。アー……アドニス。わりいこたあ言わねえ。出ていきな。あんたらには勝てる連中じゃないさ。実際、俺みたいな土の神ライナーの継承者が逃げ出してきたんだから……ヒック」レオ・バレッタは酔っ払いながらアドニスに忠告した。「ヨセー！レオ！俺達の都合だ。皇帝閣下。悪いが我々は協力しないからな」「土の神ライナーの継承者？貴方が？」「ケツ……おめえらも疑うのか？ちょうどいい。チャンク！リンクするぞ！見せてやろうぜ。あの姿を」「餞別か？良いだろ？」「レオ！行くぜ！」レオとチャンクは起き上がり、対角線に立った。「行くぜ！レオ！飛べ！」「オッケー！行くぞ！チャンク！リンクアップ！」

レオは飛び上がり、空中でチャンクと重なる。紫色の球光が輝き、徐々に白金に変わる。白金の球光は人間の形になり、レオとチャンクのリンクアップが成功する。

虎の冑を纏い、肩に一本のランチャーを装備した、重装騎兵レオ・バレッタ。それが土の神ライナーの継承者だった。

「コツ……これは？アインシャーク！」「俺も見せなくてはな。始皇帝口キよ。我に力を！」アインシャーク三世はガントレットオーブを太陽に翳した。

キーン

オープが輝き、青い鎧を纏つた、大剣を背中に背負つた騎士口キ。それは古代の聖戦の時の姿だつた。二人は精神の世界で会話した。

「口キよ。古代史の聖騎士口キよ。久しぶりだな。五百年の月日が経つか？」「ライドー。変わらんな。今はレオ・バレッタか？何があつた？この大陸で」「……私は彼の愛人の死で目覚めた。彼の愛人マリアと相棒チャンクの心がリンクして目覚めたのだ。彼の愛人はショットガンナーに殺された。再び出会つた時、剣ミサトを亡くした。悲しみの底で、彼はこの力を封印しようと苦悩している。この力が人を殺めたと。口キ。彼には関わらないでくれないか。もうあんな想いはさせたく無いのが現状だ。古代史の時代は終わつたのだ。他を当たれ」「待て！待つてくれ！ライドー。それで良いのか？世界のバランスが崩れようとしている。再び出会つたのも何かの縁だ。協力してほしい」「ならぬ！彼の為にも封印するべきだ！我々は後継者の為に何も残していない。それで良いのだ」「……我々は後継者の為に何も残していない。それで良いのだ」「……変わつたな。ライドー。昔のお前はそんな話はしなかつた。無理に強要するつもりは無い。気が変わつたら来てくれ。忘れるな。聖騎士口キも上陸したのだと。必ずお前を連れ戻す。聖戦の世界に。

必ずだ。忘れるな」「覚えておこう。それでは……」

レオ・バレッタはリンクを解いた。

「アインシャーク。お前は自分の道を行け。俺はこの大陸を出る。何処か辺境の地へ行くさ。じゃーな」「レオ・バレッタ。土の神ライドーの継承者よ。辛い想いをさせてしまったな。気にしなくて良い。私ももし貴方と同じ状況なら、とっくに捨てている。貴方は貴方で良いのだ。できればまた会いたいが……」「……暫し時間をくれないか?この力の使い道を見失っている」「……そうだな」二人は向かい合つた。「聖騎士ロキの継承者。浮游城の皇帝閣下。会えて光栄でした。それでは」「ウム。じゃーな。レオ」レオ・バレッタは船でウエストホースを旅立つた。行き先は誰も知らなかつた。「チャンク。お前は良いのか?ついていかなくて」「アア。ここで奴の帰りを待つさ。すまないな。アドニス。何もできなくて」「気にするな。お前は明日行くのか?盗賊団のアジトに?」「相棒のいない奴など居ても邪魔なだけだろう?俺の相棒はレオ・バレッタ。ただ一人だ」「忠実な奴だな。珍しい虎だ。チャンク」

続く

「アインシャーク三世達がレオと別れた頃、黄泉の世界でも物語が始まりはじめていた。

剣ミサト、ボスコ、マリア、ジャック・ギャザ里斯、パトレシアはショットガンナーを見たと言つ、パトレシアの記憶を辿り、一路、向いの山まで出掛けたのだった。

「確かに、この辺で木の実を食べてたんだ。覚えてるや、この辺のドングリは格別だからな。で、……はて？なんせ3年も前の出来事だ。奴に会つたのは、無理な話しだよなあ。なんせ最近じゃ、昨日食べた餌まで忘れてるしな。しまいにや餌まで忘れんじゃねーか？」「このバカ馬！しつかりせんか！」「ジャック、無理も無いわ。この辺は間違い無いわよねえ。パトレシア」「オオ。なんせ山深いんだ。なあ、良いだろう？一休み。飯の時間だ。ハ……香しい、芳醇な香り。今年のドングリは格別らしいぜ」四人は腰を落ち着けた。「わかったわ。一休みにしましぇう」ミサトが施す。「しつかし、エエ天氣だべさ。オラ達、死んでるだべか？」ボスコが腰を下ろす。「本当ね。心が洗われるわ」「食うか？干した肉？」ジャックが三人に差し出す。

続
<

四人と一匹は黄泉の世界で暖かい日射しを浴びていた。

「ネエ。考えたんだけどさ、アタイ達このままここに骨を埋めるなんてどう? こんな日射しの下ではショットガンナーなんてどうでも良いじゃない?」ミサトが野原に横になり、呟いた。「ンダナ。オラもそれで良いだよ。どうせ生きていても辛いだけだべ」ボスコが干し肉をほっぱりながら話した。「…………ネエ、ジャック。おかしくない? ここに来たとたんに彼らのやる気が…………」「彼等のやる気が何かに吸い寄せられているみたいだ。まるで何かの呪いの様に」「この山には何かがある。調べてみましょ。一人で」「アア。暫くはここにいそだからな」一人は、パトレシア、ミサト、ボスコを置いて調べに行つた。

「ネエ、ジャック。あの寺院は?」「凡字が書いてある。黄泉の魔方陣が。何故ここに?」「生命を死に導く凡字。聞いた事はあるわ」

「厄介な話だな。凡字なんて。死超星の文字。死を越える星。遠く宇宙の果てから来たと言われる」「怖じ氣づいたかい? ジャック?」「別に。だが嫌な予感がする。まあ、俺らは死んでるからな。その先には……」「黄泉帰り。つまりショットガンナーもこの道を

通つた。アタイを殺めたあの男も」「調べるか。あの寺院を。凡字で作られたあの寺院を」「他に宛があるのかい?」

二人は寺院へ向かつた。扉の前には一人の男が立つていた。カツと目が赤く光り、二人は立ち止まる。「ウツ…………動けない…………なんてフレツシャーだ。これが凡字の力なのか?」二人の男は話しかける。「旅人よ。我が名は霸王。死超星の騎士」「我が名は仁王。同じく死超星の騎士。ナンジラの目的は?」「一つ聞きたい。3年前、ここにショットガンナーは来たか?」「来たらどうする?後を追うか?」「アタイは奴に殺められた。その後、レオ・バレッタとチャンクと共に奴に止めを刺したんだ。そんな奴がまだ生きている。ケリを着けなきゃいけないんだ」「今、呪いに掛かっている二人もか?」「やはりお前らの仕業か?霸王、仁王。なぜそんな真似を?」「試練だ。彼等に戻る想いがあればこの呪いは解けるだろう。戻る想いは力になる。戻る場所があるから輝ける」

凡字で作られた寺院。そこには霸王、仁王と名乗る一人の死を越える星、死超星の騎士がいた。ジャック・ギザザリストマニアは、ミサト、ボスコの異変に気づき、寺院を訪れていた。

「フー。芳醇な香りと甘い匂い。取れたてのドングリは違うな。ジャック！少し持つて帰ろう。アレ？ジャック？……いない……まったくあいつらどこに行つたんだ？オーケ。ミサト、ボスコ。どこに行つたか知らねえか？」「どこでも良いじゃない？アタイらは日向ぼっこしてるんだから。黙つてな。昼寝の邪魔だよ」「ンダ。オラ、ここにいるだ。あいつらなんか知らねえだ」「なんだ？昼寝か。だからやる気が奪われているのか？ン？やる気？……思い出した！ショットガンナーを見かけた場所！確かにこんな磁場だつた！一人の男と話していくショットガンナーが何かの契約をして……ジャックやマリアも嗅ぎ付けたか。こうしちゃいられない。俺も行くぞ！……アッ！その前にドングリ、ドングリ！道中、腹が減つては困るからな」パトレシアはドングリを袋一杯詰め、ありつたけを口に詰め走った。

「クンクン。臭うぞ！ジャックだ！それに甘いローズの香り。マリアだ！捕らえた」

パトレシアは高台から寺院を見下ろす。

「イタ！あいつらだ！さてとジャックは？……あの野郎、何やつてんだ？マリアも。例の二人から放たれた十字架に捕らわれてる。オーイ！ジャック！大丈夫かー？今行くぞ！」「……霸王の兄弟。あいつは何故、凡字が効かない？」「わからん。あの馬は何者なんだ？」カラカラカラ……パトレシアの袋からドングリが落ちた。「仁王。あの木の実は？」「間違い無い。ポタラの木の実。俺達の凡字を中和させる生命力」「神々より伝わる伝説の木の実」

「つたぐ。馬！お前勘違いしてないか？俺達はだな……」「ヨセ！仁王。見事な腕前だ。その毛並み、筋肉。ジャック。お前の馬か？」「パトレシア？お前、何故ここに？」「気になつて駆けつけたんだよ！ジャック。お前の臭いを辿つてな」「臭いを辿つた？馬よ。ポタラの木の実にはそんな力が？」「霸王、仁王とか言つたな。お前達はここで何をしている？」「……すまない。誤解させてしまつた様だな。俺達は黄泉帰りの術を使える。だが、それにはこちらもそれなりの試練を与えなくてはいけないのだ。その者が本当に黄

泉帰り、つまり生き返るに相応しいか計らなくてはいけないのだ。

誤解があつたなら許して欲しい。我々も君達を誤解していた。単純に凡字を荒らしに来たと誤解していた」「それより馬よ。そのポタラの実を何処で見つけた?」「へ? ポタラの実? コレ、ドングリだよ。なあ、ジャック。ドングリだよな。俺の好物だよな」パトレシアは袋一杯の木の実を見せた。「ドングリ? ……違うな。ドングリはそんなに匂わない。だから見つけるのがむずかしいんだ。コレは違う。パトレシア。一つ良いか?」「アツ……アア。一つだぞ。俺の木の実なんだから。一つにしどけ」カリツカリツ。「面白い!」レガポタラの実か? どんな効力があるんだ?」「ポタラの実は凡字を中和させる。太古の昔、神々が生命の木を黄泉に授けた。その木は千年に一度、ポタラの実がなる。その木の実を見つけた者こそ、真の黄泉帰りに相応しい。つまりパトレシア。お前は黄泉帰りに相応しい馬だ」「待つてくれ。じゃーさつき食べたジャック・ギャザリスも?」「同じく相応しい。さあ、行くが良い。生命の星に戻るのだ。タイムリミットは一日。それ以内に戻つてこい。でなければお前達は永遠の闇に閉ざされる。黄泉の錠を破つた罰でな」「待ちな! アンタラだけを行かせる訳にはいかないよ。アタイも行くさ。それにミサトやボスコ。皆で戻るんだ」

三人はミサトのいた場所に戻りポタラの実を渡した。「ハー! 俺の木の実が四個も……アレ? 木が枯れてる。あの……なんだつけ?」「神々よ。生命の木を授けてくれてありがとうございます。我々が生命の星に戻る事をお許し下さい」ジャックは手を組んで神々に祈りを捧げた。「ネエ。何があつたの?」「ンダ。オラ達にもわかるように説明してけれ」

ジャックとマリアは寺院に向かつ途中説明した。

「へー。そんな事があったの?」「凡字に生命の木。不思議な世界だべな」

「よし。集まつたな。旅人よ。我々からも頼みがある。3年前、この寺院を訪れた男がいた。彼の名はショットガンナー。奴を連れ戻せ。ジャック。お前にこの数珠を授けよう。コレで奴の魔力を無効に出来る。アドニスに、神の遣いに渡して欲しい。期限はわかつてないな」「待つてくれ。俺達はアインシャーク三世やアドニスに用があるんだ」「彼等なら既にウエストホースにいる。つまり行き先は同じだ。皆、ショットガンナーを目指している」「ソリヤー都合が良いなあ。ジャック。離ればなれになるより纏まって行動出来るしな」「決まりだ! 行くぞ皆!」

パトレシア、ジャック、ミサト、ボスコ、マリアの五人はチーム黄泉帰りとして、再び生命の星に降臨した。たつた1日の出来事だった。

帰らざる時の果て 完結。

次回、集結の絆。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6189y/>

第5話 帰らざる時の果てその1

2011年11月23日17時46分発行